

日本の中東・イスラーム研究の歩み 未来へ

明治期に発する中東・イスラーム観察

日本人が中東の現地を訪れて、あるいは中東あるいはイスラーム世界の人物との直接の交流を通じて、中東を知りイスラームを知る努力をはじめたのは、明治期以降のことである。明治期から一九三〇年代まで、日本からヨーロッパに「洋行する」場合、汽船はスエズ運河を通過したから、ヨーロッパにおもむいた日本人は、誰もが中東の一角を突見したものだ。その中には、すこぶる主体的（みずからの課題意識をもって）、かつ知的に（事物の背景を見きわめる洞察力と公正な観察眼をもって）、中東またイスラームの実像を眺めた人たちがいた。

(一) 吉田正春（土佐立志社以来の自由民権運動の活動家であり、後には伊藤博文の欧州憲法調査にも参加した）のひきいる政府使節団が、一八八〇年（明治一三年）カージャー朝ペルシアに派遣され翌年帰国したが、吉田と団員の古川宣誓のふよし工兵大尉は一年ないし一四年後にそれぞれ体験や観察を記録した旅行記を刊行した（ともに、『明治シルクロード探検紀行文集成』²、ゆまに書房、所収）。イランの山地

『イスラーム誤認』、
岩波書店、2003年

を越える苦難の旅を経て、なお日本が課題とする「文明開化」の負の側面が顧みられている。旅行記の特色は、杉田英明『日本人の中東発見』（東京大学出版会）が詳しく検討している。

(二) 明治期の日本人は、不平等条約の改訂をめざす条約改正運動の中で、エジプトの法制ことに混同裁判所（外国人判事を含む）の実態に強い関心をもった。英国が条約改正に応じる条件として、日本がエジプトと同種の裁判所を設置するよう示唆したからである。日本政府もエジプトの実地調査を繰り返し実施した。その間、一八八二年に英国がエジプトの自由民権運動を武力制圧してエジプト全土を占領すると、八四年には、同志社の新島襄が、セイロン島に流刑にされたエジプトの指導者アフマド・オラービーを訪ねて面会している。八六年には、欧米視察の旅に出た谷干城農務大臣一行がエジプト現地を視察するだけでなく、やはりオラービーをセイロンに訪ねて会談した。谷の秘書官だった東海散士は、オラービーを登場させるベストセラー小説『佳人之奇遇』の執筆とは別に、一八八九年に『埃及近世史』という日本で初めて書かれたエジプト現代史を「天下読者ヲシテ公平ニ埃及ノ近世ニ鑑ミ奮厲警戒スル所アラシメンガタメ」出版する。横浜税関吏だった野村才二も、ヨーロッパからの帰途、八七年にオラービーと会見した。（日本人のエジプト観とその変化については、板垣雄三「エジプトの歴史」、『世界史講座Ⅳ 資本主義的ヨーロッパの制覇』東洋経済新報社、所収。同「エジプトの近代と日本」、『イスラム世界』4号。）

(三) 日露戦争の直後に来日した二人のイスラーム教徒知識人、エジプトの元軍人アフマド・ファドリーとインド人で東京外国語学校ヒンドスタニー語教授のムハンマド・バラカトツラーとが協力して、

東京からイスラーム世界に発信する英文の『イスラミック・フラターニティー（イスラームの同胞愛）』紙を一九二〇年九月から一〇カ月間発行した。それは、イスラーム信者だけでなく姉妹諸宗教の信者たちをもつらねる同胞愛の増進を謳（うた）っていた。この時期、ロシア帝国の支配下にあったトルコ系諸民族の有力指導者だったタタール人イスラーム教徒アブデュルレシト・イブラヒム（アラビア語名アブドゥッラシード・イブラーヒム）も来日し、朝野の歓迎を受けるが、彼も加わってこれら三人が日本人協力者とともに、列強のアジア政策に公正を要求する亜細亜義会を結成し、日本語機関誌『大東へマシュリク・アーザム』を発刊した。イスラームに改宗した山岡光太郎（こうたろう）は、一九〇九年アブデュルレシト・イブラヒムとともにマッカ巡礼に参加、日本人ハーツジュ（巡礼達成者）第一号となる。彼の巡礼記録『世界の神秘境アラビア縦断記』（一九二二年）にはじまる日本人巡礼者の一連の記録は、前嶋信次編『メツカ（芙蓉書房）に採録されている。ムハンマド・バラカトツラーは、京都大学の羽田亨（はねだ）が一三世紀中国泉州から慶政上人のもたらした「南番文書」を解説するのに協力した。アブデュルレシト・イブラヒムは、一九三三年ふたたび来日し、三八年開設されたモスク＝東京マスジド（現在の東京ジャーミイの前身）のイマーム（集団礼拝の先導者）となり、四四年、敗戦直前の日本で客死するが、その間、日本人研究者井筒俊彦にアラビア語を手ほどきしたばかりでなく、学問の神髄を教えたと（本項目の記述の多くは、上掲の杉田『日本人の中東発見』に負っている）。

（四）アジアをめぐる大調査旅行（文部省派遣）の一環として、日露戦争のさなか、中東を調べてまわっていた建築史家の伊東忠太は、「二つの世界」論など突き破る眼で、世界の文化融合の中に法隆

寺を位置づけるあまたの新知見の収集を続けていただけでなく、中東の社会・文化・人情に接して、それへの鋭い文明批評的観察を行っていた。「支那人はよく堯舜（じょうしゆん）の話を説き、唐宋の文化を誇るが、土耳其（トルコ）人も古え（いにしへ）の全盛を自慢する。過去の夢を説いて自ら慰むるようでは、とても駄目である」「土耳古・埃及旅行茶話」、『伊東忠太著作集』5、所収）と厳しいが、庶民とあたたかな共感を分かち合っている。シリア人警官が語るそんな彼の姿や、戦時下になんか学術調査をやらせている日本に、興味をそらされた英国人旅行家・考古学者・「国家の公僕」（情報工作員）、ガートルード・マーガレット・ベル女史が、伊東について聞いた噂を『シリア縦断紀行？』（田隅恒生（たぐみこね）訳、平凡社〔東洋文庫〕に記録した杉田英明が上掲『日本人の中東発見』で指摘）。伊東はバグダード行き（バグダード）の夢をついに果たせなかったが、伊東と不思議な縁でつながるガートルード・ベルに文字通り因縁深い（彼女は「イラク」という名の国の設計施工に活躍し、バグダードで没した）そのイラクに米英が仕掛けた戦争ただ中の二〇〇三年四月、奇しくも、鈴木博之（編著）『伊東忠太を知っていますか』（王国社）という本が現れ、この「建築の巨人」が日本社会の中東・イスラーム認識のため用意しておいてくれた仕掛けに光があてられ記念されることになったのは、感慨深い「事件」だった。

(五) 地理学者・著述家・政治家の志賀重昂（しげしげ）は、すでに一九世紀末に、日本人にはなじみのない景觀をまで含めた「風景」という概念を論じていたが、一九一〇年には彼自身、世界一周の旅に踏み出した。一九二二年マスカトの王宮にオマーンのスルターン・タイムール・ブン・ファイサルを訪ねた後、湾岸を抜けてイラクから英国委任統治下のパレスチナに向かう。一九二六年に出版されるこの踏査旅

「行の記録『知られざる国々』は、二〇世紀の化石燃料時代の到来を予見しつつ、それゆえに操られるパレスチナ問題の混迷を洞察する先見性にみちた仕事である。これについての紹介と考察は、牟田口義郎『志賀重昂の中東紀行(一)―(七)』(『中東通報』二〇九、二一七、二二三、二二三、二四四、二四六各号、所載)であり、関連して、同『アラビアのロレンスと日本人』(N.T.T出版)も参照するとよい。一九三二年、スルターン・タイムールが退位して日本にやってきたときには、志賀はすでに五年前に亡くなっていった。タイムールは神戸に住んで日本女性との間にプサイナ姫をもうけたが、やがて母がみまかった娘を連れて帰国した(下村満子『アラビアの王様と王妃たち』朝日新聞社)。

(六) 以上とりあげた事例が共通に指し示す「新しさ」を考えようとすれば、明治期に先立つ時代と比較してみることがどうしても必要になる。それには、読者にすでに何度も参照求めてきた杉田英明の研究『日本人の中東発見』が役に立つが、一九四〇年に書かれていた小林元『日本と回教圏の文化交流史——明治以前における日本人の回教及び回教圏知識』(中東調査会)という先駆的な作品にも、注目しておきたい。

日本における中東・イスラーム研究の始まりと展開

(1) 「第一世代」の事始め

明治期から出現しはじめる新しい見識がどんなに魅力に溢れたものだったにせよ、中東・イスラーム

ム研究と呼ぶにふさわしい営みが見られるようになるのは、一九三〇年代後半以降のことである。一九三七年をはさんで、その前後に、イスラーム研究に関連するいくつもの団体やグループが活発に活動しはじめた。大日本回教協会、回教圏研究所、外務省回教班、満鉄調査部（南滿洲鉄道株式会社東亜経済調査局）、太平洋協会、東亜研究所、民族研究所、西北研究所（中生勝美「内陸アジア研究と京都学派」、中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、所収、を参照）などが、それぞれに機関誌を發行したりして、研究・調査活動の成果を發表した。

このような活況の背景には、中国大陸への軍事作戦の進行過程で、また「南進」（東南アジア進出）の展開に向けて、西北中国や東南アジアやインド亜大陸のイスラーム教徒住民に対する工作（働きかけ）の必要性が痛感されていたという事情があった。日本の軍部は、明治期以来、ことに対ロシア戦略の脈絡で対イスラーム政策を系統的に追求していた（たとえば、一九世紀末、陸軍大佐福島安正やすちかによる広範にわたるロシア軍事情勢探査活動の一端は、「中央亜細亜より亜拉比亜へ」、金子民雄訳編『シルクロード紀行Ⅰ』海外渡航記叢書3、雄松堂出版、所収、に見られる）が、この時期にいたって軍部はイスラーム研究の組織化に対して積極的支援を展開するようになる。中国や東南アジアや南アジアのイスラームへの関心は、いやおうなく中東・イスラーム研究を全般的に促すこととなった。

このような国策に便乗した動きの中にも、ただ時流におもねるといってない客観的な学術としての中東・イスラーム研究が開始されていた。とくに、回教圏研究所の月刊の研究誌『回教圏』に盛られたかすかすの仕事は注目すべきものである。それは、トルコ研究の開拓者で包容量ある所長の大久

保幸次こうじとリベラルな財政支援者たすけで地位・人品とも申し分ない徳川家正公爵とのコンビが時代の嵐をしのぐ風よけとなったおかげで、つかの間の学問的自由が保障された果実であった(『回教圏』は構ビブリオ刊行の復刻版がある。また、回教圏研究所の研究部門の責任者だった野原四郎がのちに回想してまとめた、野原『アジアの歴史と思想』、弘文堂、所収「III イスラムについて」、も参照)。

『回教圏』をはじめ、大日本回教協会の『回教世界』、外務省の『回教事情』、満鉄東亜経済調査局の『新亜細亜』などを拠点として、この時期に中東・イスラーム研究を行なった人々は実に多彩である。大家・中堅・新進。専門も違えば、立場も違う。東亜経済調査局のリーダーで敗戦後A級戦争犯罪人とされた大川周明しゅうめい、乾燥アジア地域史の大村謙太郎けんたろう／松田壽男ひさお、中国研究者として知られることになる野原四郎しゅうりょう／竹内好たけうち／小野忍しのぶ、イスラーム文化研究の足利惇氏あつむね、モンゴル研究家の村上正二まさつぐ／岩村忍しのぶ、トルキスタン研究者の三橋富士男みつはし／佐口透とほ、羽田明、中国のイスラーム化過程を追跡した田坂興道こうみち、西北中国のイスラームのフィールド調査にあたっていた石田英一郎えいいちろう／梅棹忠夫あきお、宗教学者の古野清人きよひと／小口偉一おごち、仏教研究とイスラーム研究をつないだ鏡島寛之かがみひろゆき、東洋思想研究の地平を拡げる井筒俊彦しゅんげん、フランス史専門家となる金沢誠、哲学者古在由重こざいよししげ、キルケゴール研究者となる齋藤信治しんじ、東京や大阪の外国語学校(のちの外国語大学)でインド・イラン研究やアラブ研究の開拓者となった蒲生禮一かみうれい／中野英治郎えいじろう／林昂たかし、イスラーム法に着目した飯田忠純ただじゆん、外交官出身の笠間梶雄かきま、外務省アラビストの田村秀治しゅうじ／川崎寅雄たけお／小高正直おだか／多田利雄、東南アジア占領地で司政官としても働いた板垣与一

鈴木朝英ともしげ、ジャーナリストの眼で中東を觀望した甲斐静馬、といった人々の名前がまず浮かぶ。このように多様な人々を一括して「第一世代」と呼んでおこう。

しかもその周辺には、さらに広い場で、イスラームへの関心をあたたためる人とその営みがあったことにも、目を向けておきたい。中国法制史の仁井田陞にいだのぼるが北京のイスラーム教徒の商工業ギルドを調査し、国際政治史の江口朴郎が『回教圈』誌にサイクス・ピコ協定を正面から扱う国際的にも先端的な論文を寄稿していた。より長期的に大きな影響力をもつ仕事としては、宮崎市定がイスラームの拡がり（いわばネットワーキング）を視野に収めた壮大なアジア史の構想を開示しはじめていた（『宮崎市定全集』2「東洋的近世」、「東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会」、「アジア主義とは何か」、18「アジア史概説」、19「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」、20「菩薩蛮記」、いずれも岩波書店。なお、「菩薩蛮記」は『西アジア遊記』中公文庫、としても読むことができる）。

だが、以上見てきたようなイスラーム研究の盛況は、敗色深まる中であつげなく雲散霧消していった。研究組織はいずれも、戦争末期には活動不能の状態に陥り、一九四五年の敗戦とともに壊滅する。証拠隠滅いんかくのための解散もあつた。資料は空襲で焼けるか、占領軍に押収されるかした。国破れ食糧も欠乏しては、研究どころではない。もともと、世を忍ぶ仮の姿として、この分野に身を置いた左翼の人たちもいた。多くの研究者が中東・イスラーム研究を放棄し、転進していった。この分野で踏みとどまった前嶋信次／蒲生禮一／井筒俊彦／岩永博／など少数の人たちは、研究面で孤立分散する形となった。「第一世代」の中には、戦死や病没のため、次の時代を見ることのなかつた人も少なくない。

(2) 「第二世代」の役割

中東・イスラーム研究がふたたび組織的に動きはじめるのは、一九五〇年代半ば以降のことである。時あたかも、アラブ民族主義が高揚し、第三世界として自己主張するアジア・アフリカ・ラテンアメリカの自立への息吹が社会の関心を集めていた。さらに、サウジアラビアおよびクウェートから利権を得て湾岸で原油採掘の操業を開始した(株)アラビア石油をはじめとして、中東に進出する企業が増え、中東の現地で中東の現実を直接取材し報道するジャーナリストの活動も、拡大していった。

中東調査会が推進者小林元、協力者岩永博を中心に組織されるのは、一九五六年であった(財団法人の認可を受けるのは一九六〇年)。この活動を支えたのは駐エジプト大使を務めた土田豊である。調査研究団体とは言えないが、日本アラブ協会が中谷武世(なかつた たけよ)によって一九五八年に設立された。一九六〇年には、中東研究のみならず広く発展途上国研究の中心機関として重きをなすことになる特殊法人アジア経済研究所が発足した(初代所長・東畑精一(とうはた せいいち))。一九五四年、三笠宮崇仁親王(たかひら なるひと)を会長に、新規法人男(おとこ)／飯塚浩二／石田英一郎／石田幹之助／板倉勝正／江上波夫／大畠清／蒲生禮一／左近義慈(さしむね ぎじ)／定金右源二(かねみぎ)／杉勇／角田文衛／内藤智秀／中原与茂九郎／前嶋信次／その他の人々によって結成された日本オリエント学会は、一九六三年に社団法人としての地歩を固めた。これと同じ年、日本イスラーム協会は松田寿男の尽力で学術団体として再建され、機関誌『イスラーム世界』を発刊する(同会は旧大日本回教協会を継承したものの、活動不能に陥っていた)。一九六一年には、岡倉古志郎らがアジア・

アフリカ研究所を設立していた。この研究所の活動には、上原専祿や江口朴郎なども協力する。

しかし、以上のような動きを支えたのは、それらに参加していった新しい世代の人々であった。敗戦直後ないし敗戦まもなくの時期に研究者として本格的に活動を開始する遠峰四郎／伴康哉／佐藤圭四郎／山田信夫／護雅夫／荒松雄／藤本勝次／中田吉信／本田実信／福島小夜子／磯田和子／前田慶穂／嶋田襄平／小堀巖／深井晋司／大野盛雄／黒柳恒男／鈴木八司／小泉文夫／末尾至行／などの人々、そしてこれに続く人々が、それである。すでに一九五四年には、大学卒業後まもない若手の研究者たち（インド関係の石田保昭／中村平治／らと協力して、中東関係の中岡三益／矢島文夫／加賀谷寛／林武／板垣雄三／など）が自主的に集まって同人誌『インド・イラン評論』の刊行を始めていた。東京外国語大学にもアラビア科が開設される一九六一年からは、三木亘らを中心に若手研究者による西アジア研究サマースクールが信州白馬村で開催されるようになった。

一九六四年に設置された東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、一九六七年から「イスラム化と近代化に関する総合的研究」（通称「イスラム化」）の共同研究プロジェクト（責任者ははじめの四年間は板垣雄三、それ以降は三木亘。初期の運営中枢は前嶋信次／嶋田襄平／板垣雄三）が出發し、中東・イスラーム研究者の全国的な交流が組織的に行なわれるようになる。一九六八年秋には、同研究プロジェクトは、日本学術振興会の招聘プログラムの支援を得て、エジプトの歴史家ムハンマド・アニス（カイロ大学）の来日が実現した。このようにして成立した共同討議と協力のネットワークは、後続の人たちが自由に出入りして研鑽と交流を進める場となっていく（座談会「イスラム化」

プロジェクトの回顧と展望」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「通信」八二号、を参照。

オーブンの研究交流の場では、高橋通敏／中山賀博／栗野 鳳^{おむり}／加藤淳平／愛甲次郎／野口雄一郎／中村英雄／根岸富二郎／津村光信／木村修三／鳥井順／折田魏朗^{じやうらう}／中山茂／吉田光邦／原広司／山形孝夫／荒井猷^{きょう}／伊東俊太郎／真田芳憲／田中民之／関寛治^{ひろはる}／武者小路公秀／西川潤／伊瀬仙太郎／今永清二／米山俊直／日野舜也／藤井知昭／坪内良博／中原道子／中村光男／小西正捷^{まさとし}／木村英亮^{ひさあき}／森安達也／などのように、専門は中東・イスラーム研究と異なるかズレがあるとしても、それに貢献したりそれと協同したりして、ともに成果を分かち合う人たちがつきつきと出現する展開へとつながっていく。

ワールド調査が本格的に開始されたことは、この段階のもっとも大事な特徴である。まず、一九五五年に京都大学カラム・ヒンズークシ学術探検隊（隊長・木原均）が、アフガニスタン・パキスタン・インドで植物学／地質学／人類学／考古学／言語学／医学／などの専門家集団による総合調査を行なった。すでに「第一世代」の活動として「蒙疆^{もうきやう}」調査を経験していた梅棹忠夫は、このときアフガニスタンを踏査する（梅棹『モゴール族探検記』岩波新書／同『文明の生態史観』中公文庫、を参照）。翌一九五六年には、江上波夫を団長とする東京大学イラク・イラン遺跡調査団の活動が開始され、この事業には曾野寿彦／深井晋司／三宅俊成／堀内清治／石井昭／甘粕健／松谷敏雄／らが協力した。これ以降、発掘調査を含め、中東での現地調査はさまざまなグループによって展開されるようになる。その一つとして、早稲田大学は、川村喜一を中心に、一九六六年からの準備過程を経て、一九七二年ル

クソルで本格的な古代エジプト調査に着手した。中島健一／桜井清彦／吉村作治／らがこれに参加した。

嶋田襄平に始まって牧野信也／中村廣治郎／上岡弘二／花田宇秋／間野英二／薮勇造／と続くような欧米留学の経験者はもちろんいたが、さまざまな専攻分野で、むしろ中東現地の大学・研究機関に留学する人が増加していく。井本英一／加賀谷寛／田中四郎／勝藤猛／縄田鉄男／森本公誠／佐々木淑子／杉村棟／岡崎正孝／岡田恵美子／柘植元一／飯森嘉助／磯崎定基／内記良一／冨塚俊夫／片倉もとこ／糸賀昌昭／中村満次郎／黒田壽郎／池田修／永田雄三／大岩川和正／高橋正男／石田進／加藤和秀／小田壽典／永田真知子／小山浩一郎／設楽国廣／木村喜博／山田稔／ヤマンラール水野美奈子／水野信男／柿崎崇／その他、一群の人たちである。護雅夫／鴨澤巖／などの場合のように、現地の大学で教えるという経験も蓄積された。現地に密着して、土地カンを養いつつ、また人間的接触を深めつつ中東・イスラーム研究を構築することが、研究者全般の課題となっていた。

このような意味でも、新しいタイプの研究者の活動が注目されるようになった。外交官としての活動を背景にもつ埴治夫／小串敏郎／井上英一／松谷浩尚／片倉邦雄／など、マスメディアにおける経歴をもつ牟田口義郎／熊田亨／笹川正博／川本和孝／北村文夫／菊池弘／野田裕／浅井信雄／岡倉徹志／坂井定雄／奈良本英佑／など、官庁や企業での実務への取り組みの中から出発した小山茂樹／関岡正弘／冨塚俊夫／など、の存在がそれである。

国際的な研究活動／研究協力を進める上では、文部省科学研究費国際学術研究／アジア経済研究所

海外派遣／などの資金が、その重要な支えとなった。日本学術振興会が一九六五年にテヘランに海外研究連絡センター（当時の名称は地域研究センター）を開設し、年々、研究者を派遣するようになったのは、重要な変化のはじまりだった。同センターは、その後アンカラに、さらにカイロに移されて、現在に至っている。

この時期、すなわち一九五〇年代から七〇年代初頭にかけて、イスラームに関わる研究者としての自己形成をとげた人々のことを、「第二世代」と呼ぶことにしたい。現在の日本の中東・イスラーム研究の機構や態勢について、またこれまでの研究水準の達成度について、責任を負うべき立場にあるのは、なお主としてこの「第二世代」だといえるだろう。

(3) 「第三世代」とその後

日本における中東研究の環境条件に大きな変化が起きるきっかけは、一九七三年の石油危機である。その後、一九七九年のイラン・イスラーム革命、ついでエジプト・イスラエル平和条約と八年に及ぶイラン・イラク戦争、その間のレバノン戦争からイスラエル占領地パレスチナ人の抵抗運動（インテイファード）へ、そして湾岸戦争、そこから継起する中東和平問題の変転、と激烈な移り変わりが生じてきたこの四半世紀のあいだに、中東問題に対する日本の関与は、国家レベル／NGOレベルともに、もはや引き返し不能なほど決定的に深まった。

一九七三年には中東協力センターが発足し、翌一九七四年には中東経済研究所が設立された。研究

者としては「第二世代」に属し、日本オリエント学会の発展に力を尽くしてきた三笠宮の呼びかけで、一九七五年には中近東文化センターが誕生する（設立以来の歴代理事長は、前嶋信次／三上次男／護雅夫／加賀美秀夫）。一九七八年、福田内閣の時代、日本の首相の初めての中東諸国歴訪が行なわれたのに続いて、政府の中東文化ミッション（梅棹忠夫団長／上田篤／板垣雄三）が派遣されたが、これを機として、中東研究者はこぞって世界諸地域に関する地域研究センターの創設をめざす運動に力を合わせるようになった（梅棹忠夫「国立中東研究所構想私論」、中東通報、二六四号）。とりわけ板垣雄三／後藤明／松原正毅／永田雄三／上岡弘二／湯川武／らが、オセアニア研究の吉田集しゅうじなどととも、この活動の中心に立った。広く中東以外の他の諸地域にかかわる地域研究者たちの賛同と協力を得ながら重ねられたこの努力は、一六年後の一九九四年、国立民族学博物館に設置された地域研究企画交流センターJICASという実を結んだ（初代センター長は松原正毅）。

地域研究センターの創設をめざす努力が重ねられる過程で、一九八五年には日本中東学会が結成され、あらゆる言語での論文発表を認める『日本中東学会年報AJAMES』が刊行されはじめた。また、この間、「日本・アラブ関係国際共同研究」／文部省科学研究費補助金重点領域研究「中東の社会変化とイスラーム」／文部省科学研究費補助金重点領域研究「比較的手法によるイスラームの都市性の総合的研究（通称「イスラームの都市性」研究）」など、大型の共同研究プロジェクトが、それぞれ三―五年単位で次々と実施され、その成果は内外から注目された。中近東文化センターは、年一回のシンポジウムを、テーマを発展させながら一〇回まで継続するシリーズとして組織・運営した（運営

責任者・川床睦夫)。ヘパレスチナ問題を考えるシンポジウム／国際交流基金(イスラーム文明と日本)国際シンポジウム／アジア・北アフリカ人文科学国際会議東京大会／(中東における平和と共存)国際ワークショップ／等々、数多くの研究プログラムが、八〇年代にかけて実施された。以上の多様な活動を通じて、大規模な国際学術集会在何度も開かれ、遅れていたはずの日本の中東研究が国際的な牽引力を発揮できる余地が十分であることを証明した(以上のような動きを日本・中東関係史の中に位置づけた仕事として、Kunio & Motoko KATAKURA, *The Middle East and Japan, The Middle East Institute of Japan*, 1993. を参照)。

研究者個人の研究成果としては、すでに井筒俊彦のそれが国際的に高い評価を得ていたが、集団的な研究作業としての地域研究のテーマ設定と課題意識とが、上記のようにして日本から発信されることにより、外に向かつて開いた高度な国際的共同研究の組織化が開始された。一九九七年から五年間にわたって、佐藤次高が研究リーダーとなつて、新しいスタイルの大規模な共同研究「新プログラム「現代イスラーム世界の動態的研究(通称イスラーム地域研究)」が実施された。

明らかに一九七三年を境として、大学や大学院の教育・研究の場で、中東・イスラーム研究の態勢強化の必要が当然のこととして広く認識されるようになった。東京外国語大学と大阪外国語大学においては中東諸言語の学科の整備が進むとともに学生定員も増加し、東京大学ではイスラーム学科が新設された。これ以降、年とともに、国公私立大学のいたるところで、中東・イスラーム関係の教育・研究プログラムの整備が進みはじめる。関係の教員ポストもめざましく増強されてきた。高等学校でも、

ことに世界史などの教科において中東・イスラームに対する関心が強められた。歴史教育の分野では、中東・イスラームへの関心を系統的に強調する吉田悟郎らの仕事が目立つられる。

こうして、一九七三年以降、日本の中東・イスラーム研究は新しい時代を迎えたのである。研究者の数は着実に増加し、ことに才能ある若い研究者の層が急速に厚みを増してきた。「第二世代」までは、中東・イスラーム研究の専門家は、日本社会の中で奇特な珍しい存在、いわば「変わり者」と見られるのが普通だった。一九七三年からこのような状況に変化が起り、ここに新しい「第三世代」が登場し活躍する段階となったのである。

しかし、それから三〇年を経た現在では、すでにこの「第三世代」の研究者が大学・研究機関などで後進を教育し指導する立場の中核に位置している。「第四世代」の人々の出現は、湾岸戦争後の一九九〇年代に開始されたといえよう。そして、この「第四世代」の人々が今や研究活動の第一線に立つて、すでに高い知的生産性を発揮しはじめている。

「第二世代」はいうまでもなく、「第三世代」でさえ、中東・イスラーム研究者は、アカデミックな世界の中ではまだマイノリティー(少数派)だった。そればかりか、日本では、彼らはしばしば、確立された学問体系に対する批判者ないし異議申立人であり、ひそかにパラダイムの転換を期するパイオニアでもあった。しかし、世界の変質のもとで既成の学問に^{ほころ}綻びが目立つようになった現在、そして曲がりなりにも中東・イスラームの現実に対して社会の持続的関心が向けられるようになった現在、おそらく「第四世代」は、諸分野をつらねた研究者人口の中でその比重をおおいに増しているだけで

なく、社会の需要からしてその言説の社会的影響力がいちじるしく高まっていくことは誰の目にも明らかなので、もはや学問的権威の中心性からはずれた「マージナル人間」としての疎外感などは、まったく持ち合わせようもないように見える。目下責任ある立場でもっとも忙しく働いている「第三代」まで含めて、先行世代の研究者たちの多くが、程度の差はあれ、なにがしか疎外感をいだかざるを得なかったこれまでの状況は、今大きく変わりつつあるのだ。

すでに、中東・イスラーム研究者の専門性は多様に分化している。身近な同業者同士でも、相手のやっている研究の内容や質を相互によく把握したり評価したりできないような状況も生まれつつある。中東・イスラーム研究者の連帯性は弱まり、そもそも「中東・イスラーム研究」という枠組みの存立そのものさえ危うくなっていくことだろう。互いに親密で、人間的にも信頼しあい、一体感を持っていた「第二世代」が力を合わせて追求し、「第三世代」がその実現の受け皿となり担い手ともなってきたような、ナショナル・レベルでの組織化につながる共同研究や研究ネットワーク構築などは、これからは意義も魅力も薄れていくであろう。もはや「第一世代」の不思議な異越同舟のアクロバットなど、感覚的にはまったく理解不可能な別世界の物語になってしまったのかもしれない(板垣雄三「知識のラタリーフ(たのしみいろいろ)」、杉田英明編『前嶋信次著作選4・書物と旅/東西往還』、平凡社(東洋文庫)、所収、を参照)。

中東・イスラーム研究が、一方で、辺境性の活力を失って体制化するのとは避けられないとしても、他方、研究者の仕事の場がめざましく「世界化」することによって、むしろ最初から一挙に「世界

化」してしまった場しか存在しないことが自覚されるために、世界認識の面でも、ディシプリン(学術専門分野における訓練・規律・自己形成)の面でも、研究者個人の主体性の強靱さが文字通り本格的に問われることになるだろう。

これからの中東・イスラーム研究者

かつて「イスラム化」や「イスラームの都市性」などのプロジェクトがそうだったように、ひろく日本の関係研究者が結集して「(ほとんど)全員参加型」の、また「国際学術交流型」の、共同研究を組み立てる時代は、過ぎ去った。今後は、多次元の設定可能な課題ごとに、関心と方法を共有する国際規模のグループが自由に形成され、競争的に消長するといったスタイルが一般化するだろう。それが機能的なネットワークを相互に張りめぐらすことができるか。そして全体的に問題状況の把握ができる仕組みが成り立つかどうか。

ここで気がかりなのは、研究の精緻化・技術化が進んで、学問の営みの全体とは関わりのない「重箱の隅を楊枝でほじくる」作業が一人歩きする気配である。さらにこれと関連して、借り物の理論モデルに飛びつき、これに依存して、一人合点の「専門用語」で語るのが学問と思ひ込む勘違いの重症化も、心配だ。肝心のイスラーム世界は材料にすぎず、欧米学界との交流偏重の輸入「学問」ないし「国際学会用「学問」が闊歩する。「第四世代」の若者が、「中世」イスラームなどという用語を平気で

使いながら「カルチュラル・スタディーズ」の流行に乗ったりすると、その憾が深い。

つまりは、問題の立て方そのものを問う、あるいは問い直す、ということが大事なのだ。そして同時に、自分の仕事を、エリート仲間うち行為としてではなく、社会から委託されたものとして、自覚的に社会に向かって説明しようとするのが、また大事なのだ。

日本の中東・イスラーム研究は、運命的に、少なくとも以下の五つの課題に取り組まなければならないだろう。

(1) 直接的な理解を深める

中東あるいはイスラーム世界についても、思想・宗教・文明としてのイスラームについても、それらとの直接的な接触・翻訳・対話・交流・対決・インタラクティブな働きかけ・相互評価を通じて、理解を深くすることが求められる。臨地・臨場研究、そして人間関係のマネージメントが決定的に重要になる。

(2) 認識主体としての日本社会をケアする

日本社会からの、日本社会による、中東・イスラーム認識に対して責任をもたなければならぬ。すなわち、日本語世界からの中東・イスラーム「読解」が自覚的に進められるべきである。また、日本社会における、あるいは日本社会による、中東およびイスラームに関する認識のあり方に対してつ

ねに敏感であり、状況の背景を理解し、日本社会が「文明(的)／間」対話」の意味ある一主体となるように努力すべきである。

(3) 認識の全体性をめざす

中東・イスラーム研究は、「地域研究」的な立場すなわち認識の全体性を志向する立場に立たなければならぬ。言い換えれば、特定の狭い個別の学問領域の内側に安住して限定された角度から局限された問題にだけ取り組もうとする姿勢を、批判し拒否するのである。知のはたらきのネットワーク化をめざし、専門性を自在に組み替え相互浸透を促進するトランスディシプリナリーな立場から、たゆまず総合的・俯瞰的・全体論的理解を追求する。

(4) 文明誌の記述から出発する

中東・イスラーム研究は、中東あるいは広くイスラーム世界の社会・人間・文化・環境生態・資源などをめぐるあらゆる事象について、徹底してそれらの個別性・差異性・多様性を具体的に記述し、この知識を蓄積・共有していくこうとする「文明誌」(＝新時代の「博物誌」)の仕事に取り組まなければならない(第18期日本学術会議文明誌の構築特別委員会報告「文明誌」という知の新領域開拓の可能性を検証する」を参照。 <http://www.sjir.go.jp/> からアクセスできる)。既成の固定的な学問領域に執着しないで、できあいの理論・学説・体系・パラダイムから考え始めるのではなく、「事実」に即してそこから出発

する「現実」への接近を企てるのである。

(5) 新しい学知の創造に貢献する

中東・イスラーム研究は、上に述べたような目標からして、人類的立場で希求されている新しい学知の形成と機能とについて、みずから独特のやり方で達成すべき普遍的使命があることを自覚しなければならぬ。世界の科学者コミュニティは、人類と地球を滅びの危険から脱出させるために、学知の新しいあり方を模索している。それは「社会のための科学」でなければならず、現在世界が直面する難問群に対して世界の科学者が科学の立場から積極的に解決のための全体的構想を提案すべきだ、というのである。これについて、中東・イスラーム研究から発言しなければならぬ多くのことがあるのは、今や明らかだ。日本の、そして世界の、中東・イスラーム研究に期待される役割を、それぞれ明確にする必要がある。

以上の見地から、日本における、また世界の中の、イスラーム誤認をいかに克服するか、これがまず着手されるべき課題となるのである。

(書き下ろし)